

第16回、岡山芹沢文学読書会 内容報告書

■場所：倉敷市庄公民館

■日時：令和6年5月19日（日曜日）13時30分～15時30分

■課題：「神の慈愛」第5章

■参加人数 9名

■筆記者：桑田幸真

= 読書会内容 =

- ・第5章に書かれている、「天理教よ甦れ！」（小山貞市・吉村卓三：著、日新報道：1986年3月刊）の内容紹介・・・鮎ヶ瀬分教会長の自殺、及び長崎・肥長大教会長の自殺について。天理教の天文学的数字の不動産について。（国立国会図書館の本より）
- ・百年祭について、親様は良しとされていないのではないか。百年祭を期に、伊藤青年に降りて、世界に出る事になった事を知った。小平教授から、「女としての」教祖伝を書くように言われた事により、伊藤青年に会うことになった。「教祖様」・芹沢光治良著が本当に正しい事を確かめるために先生は、会われたと思う。親神様のお計らいには凄いなと思った。
- ・森次郎は、親様の書き起こしを読んだが、やはり音声で聞いた方が観念的ではなく直に心に響く、と書いてある。自分も親様のお言葉の雰囲気や波動が感じられて、自然に涙が出て来ることがある。
- ・先生は、偽物の宗教を多く見てきた。日本は経済大国になったが、心を失っている。これに共感した。その中で、先生が伊藤青年に会われた。自分も本物を学びたい。
- ・親様のお言葉を直に聞くことができるのは何百年に一度、また日本の中でも限られた人しか、ご縁を頂くことができない。ありがたい事だと思う。
- ・5章を読んだ後に、「秘蹟」を読んだが、5章を忘れる程、感動した。

・献金について、過去に、宗教組織にお金を払った事があるが、喜んで出せる時と、喜べない時があった。喜べないということは、神様に嘘をついていることと同じだと思う。これからは、自分の心に聞いて払わせてもらいたい。組織になったら、無理な献金も生じるのではないか。自分自身がしっかりした考えを持つことが大切だと思う。勉強をしておかないと本物と偽物が分らないのではないか。

・親様が存命の時に、「組織を作ってはいけない。国に許可を求めてはいけない。」と仰っていた。組織にすることによって、献金等のお金の問題が発生する。お金は生きたお金を使うということが大切だと思う。

・自分は天理教徒だが、大教会の会長等を見ると、とても見本とは思えない。多くの天理教会が閉鎖しているのを見ると、何とも言えない気持ちになる。

・自分も天理教徒だが、百年祭の裏でそのようなこと（献金に関すること）があったとは知らなかった。自分は自分にできるだけのことで良いと言われている。実態は違うという事ことが分った。

・伊藤青年に会う際、本当は会いたくなかったと思うが、親様は光治良先生の心が見抜き見通して、「女としての」教祖伝を書くように言われて、伊藤青年に会う事となった。親様の計らいには驚いた。

・親神の地球の大掃除は、大変な”事業”である。私たちが成人することにより、親神の”事業”の助けとなると思う。「人が勇めば、神も勇む」とあるが、私たちも親神の”事業”の助けとなるよう努力しなければならないと思う。

・「飲み、食い、喜び、これではならん。自ら反省して、通るのが、百年祭を過す実である」と書いてある。これこそ、芹沢文学の真髄だと思う。やはり、人間は、苦悩の中から何かを得て「神に近づく」という、使命を与えられているのではないか。節から芽が出る。という言葉があるが、神は「乗り越えられない節」を与えることはないと思う。苦悩こそ人間を成長させる糧ではないかと思う。

・壮大な親神の計画を達成するには、我々が成人することが大切だと思う。それに協力していけないといけないと思う。

・自分は「教祖様」という作品が最も好きである。イエスは十字架にかけられた。中山みきは、家を取り壊し、多くの人に施し、狐つきと言われ、牢獄に入れられた。これを見ると、楽しい楽しいでは神に近づくことはできないのではないかと思う。

・5章の中の「天理教よ甦れ！」を読んだが、神の慈愛に書かれているような、人名は出てこない。これは、光治良先生がこの本を読まれていない事の証拠だと思う。森次郎から聞いた話として書いている。資料があるとしたら、先生は文学者として、本当の事を書かれるはずである。やはり、森次郎は存在するのではないかと思う。

・先生が兄の真一を救っている。兄は何もできなかった。ペンクラブの会があった時、奥村夫人と偶然に会っている。先生がペンクラブの会長になったのは、1965年である。これも、神様のお計らいだと思う。

・真一さんにも、使命があったと思う。実際に、井出クニから「米国との戦争をしないように」と言われた。新聞記者であった真一は、国家の影響力の大きな人に、それを伝えている。命がけでそれをしている。もし、戦争がなかったら日本の運命も変わっていたのではないか。

・芹沢家の人々は、使命を持って生まれたと思う。自分の使命が果たせるか果たせないか、は他人がとやかく言う問題ではないと思う。人間が人間を評価することはできない。高次元からの評価は我々が思う事とは、違う事があると思う。

・「さあさあ、どこへも行きはせんで、ここにいるやないか」と言う言葉を読むと、先生は本当に、教祖中山みきが話をされている、という事を書かれているだと思う。

・我々も、少しでも、成人して、親神の世界助けに協力しなければならないと思う。

感想：5章では、伊藤青年に降りた、中山みきが本物だという事が書いている。地球の救済は、親神の大変な”事業”である。我々も、それに協力するためには、成人できるように、芹沢文学を通じて学んでいきたい。

以上